

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.815 2022

2022年4月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



OPINION

YMCAは平和を希求し、平和のために働く YMCA stands for peace; YMCA works for peace

— 軍事侵攻に反対し、平和を求める人びとと連帯します —

日本YMCA同盟 総主事 田口 努

戦争は、日常生活を営む街を一瞬にして破壊し、両国の軍人が命を奪い合い、子どもを含めた多くの市民の人権と命の尊厳が奪われていきます。戦争が続けば、さらに多くの血が流れ、無辜の命が奪われます。その家族や友人、知人、そして私たちの悲しみの涙は、何万倍となります。今、このひと時も恐怖と不安の中にある人びとを想います。

ウクライナYMCAは古くは第一次世界大戦時から戦争下で苦しむ若者のために活動を始め、その後も共産党組織支配下においては水面下で、独立後は長く民族紛争、貧困に苦しむ若者・子どものための活動をウクライナ全土25カ所で展開しています。ウクライナYMCA、ロシアYMCAともに、複雑な歴史を辿りながらヨーロッパのYMCAに連なり、対話による平和構築、若者の就業・メンタルヘルスについて若者自身が中心となって課題解決に望むYouth Led Solutionに注力して来しました。

今回の侵攻直後から、ウクライナYMCAでは爆撃地から逃れる人びとのための宿泊・食料・衣料品・衛生用品の提供を開始し、今後は子どもや若者の心理社会的支援を行っていきます。ウクライナ近隣諸国のYMCAでは連携を取り、24時間体制で避難民の受け入れ、生活支援が行われています。ロシア国内でも戦争反対のデモが行われています。現在の体制下では大きな力を持つことは難しい状況にありますが、世界のYMCAでは平和を希求するすべての人びとと連帯していきます。世界YMCA同盟総主事カルロス・サンヴィーは、「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、尊厳と権利において平等である。戦争は決して問題の解決にはならない。誰もが尊厳を持って扱われ、その声に耳を傾けられるべきです」と世界に発信しています。

世界、アジアにおいて人権や民主主義が脅かされることがないよう、無力でも平和を求め祈り、日頃からの平和への希求の意思として武力による平和は無いこと、戦争反対の声を掲げ、平和を求める人との連帯の意思や行動を示していければと思います。

ウクライナやロシアと関係の深い日本国内の人びと、YMCAでも留学生をはじめ、会員及びご家族の方々へサポート等、必要な対応を行い、偏見や差別を生まないよう努めます。

ウクライナ緊急支援募金

2022年4月30日まで

ウクライナYMCAが行う、爆撃地や攻撃を受ける可能性のある居住地域から国内避難する人びとへの支援活動

ウクライナ近隣諸国のYMCAが行う、国外に避難するウクライナの人びとへの緊急生活支援活動



募金方法

- お近くのYMCAを通して、または下記へ送金ください。
- ◆ゆうちょ銀行 振替口座（振替貯金）
00190-6-464236 日本YMCA同盟地域国際募金口
- ◆募金サイトからはクレジットカード・銀行・振替貯金が利用可能
<https://srv.asp-bridge.net/ymca/privacy/7>



募金は、日本YMCA同盟を通して、世界YMCA同盟に送金いたします。上記プロジェクトは、日本YMCA同盟が加盟する世界YMCA同盟と、ヨーロッパYMCA同盟のもと行われています。

ミャンマーとウクライナを覚えて

クーデターから1年を経たミャンマー
私たちにできる支援を

横浜YMCAでは30年ほど前からミャンマーのネピドー、ヤンゴン、パテイン、そしてタンゲーとニーズに応じて地域を変えながらミャンマーのYMCAを訪問し活動を続けてきました。

2019年にはミャンマーのユースが来日し、横浜YMCAに来てくれました。それからずっとミャンマーとはユース同士の交流が続いており、そのユースの1人が昨年の軍事クーデターで、軍により拘束されたとわかったときには大変ショックを受けました。日本のユースが横浜でも特別祈禱会をやらうと声を上げてくれました。このときのユースの行動力というのは大変頼もしいものでした。すぐに支援募金をスタートし、募金はマラリアの薬や難民キャンプの支援、ユースの支援、クーデターにより困窮する家庭への物資提供などに用いられています。緊急支援として、国と国ではなく人のつながり、未来を背負うユースを支えることを大切にしています。横浜YMCAがタンゲーYMCAで行っている「介護教育プロジェクト」に参加したユースたちは、今も困窮にある方々の家庭を訪問してサポートを続けているそうです。

国の状況は悪化し、インターネットの制約もあり、情報がなかなか入らなくなっています。しかし2022年の初めには、市街を出て国境地帯まで避難してい



2019年の「介護教育プロジェクト」に参加するユース

る人たちがたくさんいるためにさらなる支援が必要、という緊急のメッセージが届きました。これからもYMCAの、そしてミャンマーで草の根的に広がったつながりのなかで、私たちにできる支援を続けていきたいと思います。

横浜YMCA 高村 文子

ウクライナYMCAを思い、祈ります

ウクライナYMCAと東京YMCAは2002年から交流を行っています。ウクライナは日本文化に興味が高い国民性で知られており、「中高生プロジェクト」という活動グループによる折り紙交流から始まりました。



2006年には、チェルノブイリ原発事故 2006年の「ピーススタディツアー」で交流するユース故から20年目であったので、世界で唯一の被爆国である日本のYMCAと、被爆の影響を受けた国同士として、平和について学ぶ「ピーススタディツアー」を計画しました。東京YMCAから大学生がウクライナを訪問し、ウクライナの人と共にチェルノブイリ博物館等を訪れ、平和やウクライナ文化について学びました。ウクライナYMCAは大きな施設があるわけではなく、スタッフが地域の学校に出向いて、そこでさまざまな活動を行っていました。ツアーでは、村に住む老夫婦を訪問するなどしてウクライナの人びとの生活に触れることができました。その後も互いの国の絵本を贈り合うなどの交流が続き、子どもたちによるクリスマスカード交換は現在まで続いています。

軍事侵攻が起こった後、ウクライナYMCAにメールで連絡を取ったところ総主事から、2月26日には「テレビも見えていて情報もあり、大丈夫だ」の返事がありましたが、その後連絡が取れなくなりました。YMCAのあるキエフを離れ無事であることを、後に別のヨーロッパYMCAの総主事から聞くことができ安堵しました。

ヨーロッパの各地のYMCAでは避難民支援の活動を続け、東京YMCAでもそれを支えようと募金活動を続けています。一日も早く平和が訪れるよう一致協力し、祈りながら活動を続けています。

東京YMCA 松本 数実

日韓の大学生が米軍基地を通して戦争と平和を考える
第20回 学生YMCA日韓交流プログラム

日本と韓国の学生YMCAによる第20回日韓交流プログラムが2月27日、オンラインで行われました。1991年から相互に訪問し合いながら30年の継続となる今回、本当ならば韓国の大学生が来日する予定でしたので、直接会えなかったことは本当に残念でした。

ホストである私たちが昨年11月から毎週のように運営委員会を開いて準備した今回の交流プログラムのテーマは「駐韓・在日米軍」でした。米軍という、日韓どちらにも共通するテーマを扱うことで、これまでの歴史や現在に至るまでのさまざまな論点を知り、「今

後の米軍基地と私たちとの在り方」などについて韓国の学生たちと意見を交わし、自分だけでは気づけない視点や考え方に接するきっかけとなったことは忘れ難い体験となりました。

また、日韓文化交流では生中継でたこ焼きを作る様子や京都の街並みを見もらうなど、オンラインの特性を活かした文化紹介で盛り上がりました。

先日、ロシアによるウクライナ侵攻がありました。今回のプログラムを通して得た関係性をこれからもつなげていきながら、日本と韓国の学生と一緒に「軍隊」や「戦争」そして「平和」や「共生」について考える機会を作っていきたいと思えます。



関西学院大学YMCA 山口 菜々果

全国25のアフタースクールが参加
いじめについて考えるオンライン子どもかいぎ

東広島YMCAではピンクシャツデーの取り組みとして、「一人ひとりを大切にするにはどんなことができるか」ということを考えて、それぞれ書き出してみました。



子どもかいぎに参加する子どもたちは、みんなと話し合い、発表しない人がないようにしよう!ということを決めて、ご当地クイズや取り組み発表用のセリフ、掲示物等の準備を行いました。準備中、参加者の中では学年が上の子どもたちが下級生に「〇〇やってくれる?」と役割を与えながら協力していたことがとても印象的でした。

当日はドキドキしながら画面に映る参加者を見ていましたが、一人ひとり発表することができました。「楽しかったね」「あつという間だったよ」「来年もやりたい」等、うれしい言葉が多く聞かれました。

初めて子どもかいぎに参加した昨年まで、子どもたちにとって「ピンクシャツデー=ピンクの物を身に着ける日」でした。それが子どもかいぎに参加したことで「ピンクシャツデー=いじめについて考える」に変わりました。いじめについて考える時間があるということは、子どもたち自身が自分の気持ちと向き合うときでもあり、気持ちを言葉にする機会でもあり、成長につながる時間だと感じました。

広島YMCA 宮脇 将就